

# 東京帝国大学における学部図書館の管理運営

生涯学習基盤経営コース 河村 俊太郎

Administration of Faculty Library of Tokyo Imperial University

Shuntaro KAWAMURA

This study researched the administration of faculty library of Tokyo Imperial University. In Tokyo Imperial University, faculty and chair were granted a large measure of autonomy. It also applied faculty libraries, and their administration was variable, though much of them offered services for students. The administration of faculty library was classified into two types. First type included libraries of Faculty of Literature, Faculty of Science and Faculty of Engineering. They had decentralized administration and were administrated by assistant of each chair or laboratory. Second type included libraries of Faculty of Law, Faculty of Economics, Faculty of Agriculture and Faculty of Medicine. They had centralized administration, and much of them were administrated by staff of faculty and had been centralized after the Great Kanto Earthquake, but some of them were not centralized in arrangement of materials.

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 東京帝国大学における学部
  - A 学部の成立
  - B 学内運営制度
  - C 中央図書館と学部との関係
- 3 東京帝国大学の学部図書館の運営
  - A 各学部図書館の運営
    - 1 法学部
    - 2 経済学部
    - 3 理学部
    - 4 文学部
    - 5 医学部
    - 6 工学部
    - 7 農学部
  - B 部局図書館運営の特徴
- 4 おわりに

## 1 はじめに

近年、大学図書館は、母体である大学が市場原理、地域貢献などの圧力のもとに大きな改革を強いられていること、さらに、電子ジャーナル、インターネットの普及をはじめとする資料の形態、利用法の変化が進展していることで、大きな変革が必要な時期にさしかかっている。だが、そういった改革の基礎論となるべきである、大学図書館がそもそものどのような組織で

あったのか、という歴史的な検討は十分になされてこなかった。

日本の大学のひな形たる東京帝国大学においても、図書館という側面からの歴史的な検討は、中央館である附属図書館（現総合図書館）についてはある程度なされているが<sup>1)</sup>、それ以外に存在していた図書館については十分になされてこなかった。だが、東京帝国大学は、後に述べる様に、学部、さらには講座といった単位での自治をある程度認めており、図書館も各学部が所有し、分散制をとっていた。そのため、各学部の図書館への検討を踏まえた上でなければ、一つの大学における図書館という機関を十分に理解することはできない。

そこで本研究では、現在の東京大学の基礎となり、日本の大学、特に帝国大学にも大きな影響を与えた東京帝国大学を対象に、その図書館組織の中でも学部図書館の運営実態を検討し、日本の大学図書館研究の今後の足がかりを築く事を目的とする。検討時期は、大学という名称が初めて用いられた1877年の東京大学の成立ではなく、組織の基礎が固まる帝国大学令の公布された1886年を起点として、第二次世界大戦の影響が強くなり、図書の疎開が行われはじめた1941年頃までとする。

## 2 東京帝国大学における学部

学部図書館そのものの検討に移る前に、東京帝国大

学の中の学部的位置づけについて見ていく。まず各学部の成立、次に学部に関わる大学の運営制度、そして東京帝国大学の中央図書館である附属図書館と学部との関係を最後にみていく。

## A 学部の成立

東京帝国大学は1941年の時点では7学部からなるが、多くの学部は、様々な種類の学校が合併して設立された。

まず東京帝国大学の前身である東京大学が、東京開成学校と東京医学校との合併によって設立されたものであった。そして、法学部、文学部、理学部、医学部の4学部を持っていたが、法文理学部の校舎は神田に、医学部の校舎は本郷に置かれていた。1886年に帝国大学令により東京帝国大学<sup>2)</sup>が誕生し、学部も本郷に全て集結するが、この際、工部省の工部大学校が理学部の一部と合併し、工科大学(学部)となり、5分科大学(学部)となる。1890年には、農商務省の東京農林学校を農科大学(学部)として合併、1919年に経済学部が法学部から独立し、東京帝国大学は7学部となる。

こういった学部の新設は、経済学部をのぞいて東京帝国大学を管轄していた文部省とは異なる省での教育コースであったため、制度、規則が大きく異なっており、合併にあたっては反対もあった<sup>3)</sup>。こういった状況では制度運営をなかなか一本化できず、それぞれの学部による独自の運営を容認する土台があったといえる。

## B 学内運営制度

このように様々な学校の連合体として成立した東京帝国大学は設立当初、総長、評議会への学内管理の権限集中を図ろうとしていた。だが、実際は正式な機関として認められていた評議会以外にも、非公式の機関ではあったが、分科大学の教授会などは重要な機能を担っており、分科大学の自律性をおさえることはできていなかった。さらに、権限集中体制確立の中心人物であった当時の文部大臣森有礼が横死したことによって、この体制は完全に実現されず、その後改革されていくこととなる<sup>4)</sup>。

この改革の担い手となったのは、1893年に文部大臣に就任した井上毅であった。井上の大学に対する主な改革は、評議会の改革、分科大学教授会の設立、講座制の設立など、政府・官僚から大学人への大学運営の委譲そして大学内での専門性の重視を打ち出すもの

であり<sup>5)</sup>、これにより大学内での、政府に対する評議会、評議会に対する学部(教授会)、講座の一定の自治が確立された。中でも、1つの講座に1人教授を割り当て、教授が学生への教授と研究指導を、助教授と助手がその補佐を行うことを定め、教授の専攻責任を強調した講座制の設立は、各学部の運営に大きな影響を与えた。講座は、学生が所属する単位として既に存在していた学科とともに、大学における研究と教育の単位となっていた。そして、講座成立の少し後から、各学部には研究室が設置されていく。これは、学部ごとにその機能は異なるが多くの学部では、講座や学科単位で設置され、「教官のみならず、学生をも出入りさせて研究を指導する常置機関」<sup>6)</sup>として、大学における、研究機能と、主に授業外の実験機能の中心を担う場であり、教官の居室に加え、実験室や図書室などが設けられていた。

井上の改革以後も学内の自治の波は高まった。1914年には沢柳事件が起こり、学部の教官任免権と総長の職権の関係で学部側が勝利をおさめ、人事権でも優位であることが示された。これは京都帝国大学の事件ではあったが、同様の慣行は全ての帝国大学に広がっていた。1918年には大学令が公布され、分科大学の名称が学部、教官も各学部所属から大学所属に変わり、名目上は総合性が強調されたが、実際には、単科大学との関係で名称が変化したという側面が強く、学内の管理機関である評議会、教授会の学部への権限に対する大きな変化は無かった<sup>7)</sup>。講座も、それぞれの学問の傾向に従って内容が分化したが、その独立性は高いままであった。大学内の講座の内容を検討した京都大学の大学問題検討委員会は<sup>8)</sup>、原子物理学など少数の新しい学問以外には研究者、講座間の壁が厚く、講座間の独立が保たれていることを指摘している。

## C 中央図書館と学部との関係

これまで図書館史において中心となって検討されてきた中央図書館である附属図書館は、独立した組織として東京帝国大学設立当初から存在していた。帝国大学図書館規則の第1条では、附属図書館が「大学院及ヒ分科大学(学部)ノ図書ヲ貯蔵スル所」とされ、中央図書館として大学全体の図書を一括して扱うことが明記されている。そして、1897年には館長を、1908年には日本の大学図書館初の専門職としての司書・司書官を設置するなど附属図書館組織の整備が進められた。

だが、図書館規則の第3条には、「公用ニ供スル図書ハ冊数ノ制限ヲ設ケズ帝国大学ハ書記官分科大学ハ大学長若シクハ教室主任之ヲ借受スルモノトス」とあり、「公用」により附属図書館から学部は図書を無制限に借り出すことが認められており、図書館規則制定直前にだされた各学部と附属図書館への総長からの「達」では、「各分科大学ニ於テ所用ノ書籍ヲ買入レ又ハ製本シタトキハ三日以内ニ図書館ニ廻付シ捺印及登簿ヲ乞フヘシ図書館ニ於テハ二日以内ニ必捺印登簿シテ更ニ交付スヘシ」<sup>9)</sup>とされ、全ての図書が附属図書館に配架されるわけではなく、各学部も図書を備え付けることが認められていた。さらに、附属図書館管理(当時の館長職)田中稲城は1890年に、「今、大学ノ注文法ハ各教員ヨリ各其所属ノ分科大学事務掛ニ申込み、事務掛ニ於テ之ヲ纏メテ注文ヲ為シ、其書籍ノ到着スルヲ待テ之ヲ図書館ニ回付スル」<sup>10)</sup>と述べ、その後を継いで附属図書館館長となる和田萬吉も1896年に、「行政部ニ属スル諸係中講書係ハ本館ニ設置サレズ、現ニ分科大学ニ於テ其事務ヲ取扱ヘリ」、「本館ガ其保管ニ歸スベキ図書ノ購買事項ニ就キテ、何等ノ関係ヲモ有セズ」<sup>11)</sup>と述べており、実際には附属図書館は学部で購入された図書の登録の手続きが行われるだけの場であったことがうかがえる。

こういった制度と実態の乖離は、徐々に実態に則して制度が変わっていくという形で調節されていく。まず、「東京帝国大学一覧」では、1908年<sup>12)</sup>から農科大学が、1926年<sup>13)</sup>からは航空研究所などの附置研究所が、附属図書館とは別に図書を管理している、とされている。農学部については1935年の本郷移転後はこの記述はなくなるが、研究所についての変更はなされなかった<sup>14)</sup>。さらに、1918年の図書館規則改正によって、各「教室研究室其ノ他部局」における図書の保存責任者は「各部局ノ主任若シクハ長」となり、規則上も学部所蔵図書は、附属図書館の管理から離れた。この後、戦後になるまで図書館規則においてこの部分は改正されず、附属図書館による学内の図書に対する集中管理という理念は慣行上においても制度上においても消滅した。

### 3 東京帝国大学の学部図書館の運営

東京帝国大学の管理運営は、以上のように学部または講座単位の影響力が強く、それぞれ独自の運営が可能であった。本章では、そういった各学部の図書館について、学部のどの単位で管理されていたかという運

営の変遷を中心に検討し、学部図書館の運営の全体的な特徴をまとめていく。

実際に検討に入る前に、本研究の対象となる学部図書館について定義を行う。既に述べた様に、東京帝国大学の図書館規則では、組織としての学部図書館は、設置が可能ではあったが明文化はされていない。だが、実際には学部所蔵の図書、雑誌は存在し、その管理は学部内で行われていたため、本研究では各学部所蔵の図書を管理している学部内の組織を学部図書館と定義する。

#### A 各学部図書館の運営

##### 1 法学部

法学部は、学部における主たる教育目的が特定の分野の法学者の育成ではなく、官吏の育成にあったためか、講座数は最終的に35までになるが、学科は法律学科と政治学科の2つのみしかほぼ存在していない。

初期の法学部の図書の管理については、1902年に十年計画の原案の討議が行われる中で、法科大学図書館案がだされたこと、さらに教室増設が研究室や列品室に加え書庫についても3階建て100坪と決定されていたことから<sup>15)</sup>、学部全体で集中的に行うことが意識されていたのではないかと考えられる。だが実際には、いくつかの講座からなる研究室が1908年に現在の法学部とほぼ同じ場所の法文学部本館にまとめられた際に、図書は各研究室ごとに置かれており<sup>16)</sup>、管理を誰が行っていたかは明らかではないが、少なくとも図書の配架は分散的になされていた。

だがその後、関東大震災による焼失から再建された建物では、研究室の再編が行われた。研究用の部屋が教官個人個人に与えられ、図書も中央書庫に集中して配架された<sup>17)</sup>。さらにこの頃、司書官を事務主任にあてていた<sup>18)</sup>ことから、図書の管理は集中的になされ、その担当者は主に事務であった、と考えられる。

このように法学部図書館の整備は進んでいったが、当時の法学部の閲覧室へは推薦状がない限り学生が入れず、法学部の図書館ではなく附属図書館を法学部生は主に利用していたため<sup>19)</sup>、図書館は教員を主な利用対象として運営されていた。

##### 2 経済学部

経済学部は、1919年に法学部より独立する形で学部が設置された。講座は最終的に20講座にまで増えるが、学科は経済学科と商業学科の2つであった。独立前から、経済学関係の学科では「演習制度」が重要視

されていた。特に、1910年に外国人教師ハインリッヒ・ヴェンチヒによる、演習のための特別の教室、研究室及び専門図書館が不可欠であることを強調した「東京帝国大学ニ於ケル経済学教授法改良意見」<sup>20)</sup>は大きな影響力を持った。これをうけ、1900年に設立され経済学部の前身の一つ<sup>21)</sup>となる経済統計研究室の整備が進められる。1911年に制定された研究室規則では、「学生研究室」、「主任及教授研究室」、「書籍室」、「演習室」を設け、「書籍ノ出納ソノ他」を任とし「所謂ビブリオテカーノ専門図書掛タルコト」である事務員一名をはじめとする研究室職員を置く事などが、明らかにヴェンチヒの「改良意見」を下敷きにして定められ、さらに田尻文庫など図書の収集も積極的に行っていた<sup>22)</sup>。

法学部から独立した後も、法学部、文学部と同じ建物に居を構えたまま、教官、特に助手が選書を行い、学部事務（関東大震災前後には和書係3名、洋書係2名）が図書を管理し、教官も学生も自由に閲覧できる学部図書室を形成した<sup>23)</sup>。

関東大震災によって、蔵書はほぼ全て失われ、法文学部同様に研究室も失うが、1927年の復興後は、教官の研究個室、学生の閲覧室、20万部を収容しうる書庫といった様々な設備を備えた研究室を持つにいった。これにより、以前の研究室では教授室に置かれていた資料の一部<sup>24)</sup>も含め、すべて書庫に所蔵する事ができるようになったと考えられ、学部所蔵図書を集中管理し、教官、学生全員が必要に応じて随時利用できるという体制がよりはっきりしたといえる。学生は選択科目であった演習に参加していないと利用できなかったにも関わらず、学生閲覧室は常に八割方埋まっていたらしく<sup>25)</sup>、学生の利用は活発に行われていた。

### 3 理学部

理学部は、増減が何度かあるが最終的には11となる学科があり、これを運営単位とし、研究室もこの単位で設置された。

これらの学科の運営は、例え同じ建物に置かれていても学科が違えば運営も異なっていた。一例として、現在の生物化学科の一部にあたる動物学科の研究室の置かれた場所がどのように変遷したかをみると<sup>26)</sup>、4度の移転を行っている。東京帝国大学成立前年の1885年から1888年は青長屋と呼ばれた木造の建物に、地質学科と植物学科とともに置かれた。与えられた部屋は3部屋しかなく、教授室、助手室、講義室にそれぞれあてられた。1888年から1893年に

は医学部本館の西翼に移転し部屋の数も5と増えた。1893年から1910年には地質学科と鉱物学科とともに正門付近にある後の法学部棟に、1910年から1934年には弥生門付近の建築に移り、前述の二学科に加え地理学も途中から同居した、1934年からは理学部2号館にこれらの学科に加え、植物学科、地質学科とともに移転している。これらの研究室では、3部屋しかなかった青長屋時代をのぞいて、すべて学科の図書室が存在している。

図書室を含む研究室の運営は、助手が行っていたと考えられる。例えば、数学は1933年に新しく就任した助手が中心となって、書庫と閲覧室を分け、閉架式にし、目録を完備し管理を厳密に行おうとしていた<sup>27)</sup>。

ただし管理者は同じ助手であっても、各学科はかなり多様な運営方針をとっていた。数学科は閉架式の運営を行おうとしていたが、化学科では、「全く自由に、自己の書斎の如く引き出して見られる」という様に開架式が維持されていた<sup>28)</sup>。また、天文学科では、学生が観測結果の計算や息抜きを行う、勉強部屋としても運営されていた<sup>29)</sup>。

### 4 文学部

東京帝国大学成立当初の運営は不明だが、1897年から講座ごとに研究室が設けられ始めた。学科は、幾度かの変遷を経て1910年から講座とほぼ一致する19専修学科が設置されるが、それ以前から学生は各研究室に実質所属しており、これが運営の単位であった。図書室も研究室ごとに設けられる。1910年には、心理学や社会学など少数の研究室以外は理学部動物学科から移管された建物に研究室を設置するが、関東大震災により、別の建物にあった心理学をのぞくほぼ全ての建物が焼失したため、全ての研究室が移転した建物が1935年に完成するまで、附属病院の南や、農学部の建物などを各研究室は点々としていた<sup>30)</sup>。

研究室及びそこに含まれる図書室は、管理も研究室レベルで行われていた<sup>31)</sup>。研究室及びそこに含まれる図書室は、教官、特に助手が運営していた。1936年以降の図書購入記録が記された心理学研究室の図書購入台帳には図書購入手順が記されており、書店からの見計らい本を教授が購入するか返品するかを決定すること、図書の配架だけでなく、分類、カード作成も研究室で行うことが明記されている。附属図書館は、図書購入後、備付証2通を添えて現品の図書を一時的に提出するのみしか関わっていない。これはおそらく登録のために行われた手続きであると考えられ、さらに、

実際の心理学研究室での図書購入の記録を見ていくと、附属図書館に提出されていない図書もある。雑誌の購入手順は残されていないが、現在も研究室単位で購入されている事からこれも同様の手続きがとられていたと考えられる。ただし、台帳の図書購入手順には、見計らい本の重複品のチェックの際に、研究室だけでなく文学部全体の「カード」、おそらくカード目録だと考えられるが、これと重複がないかの確認を行う事が明記されており、多少は学部全体の蔵書を意識した管理が行われていたことがうかがえる。

また、図書室は教官だけでなく学生の利用も想定されており、1936年から宗教学研究室の副手となった深川恒喜は、研究室の教官が執筆した著書のカード目録を作成し、学生の参考としようとして試みている<sup>32)</sup>。

## 5 医学部

医学部は、専門職たる医師を育てる事が教育の主目的であり、医師は制度上医学全般をおさめている必要があるため、学科は医科と薬科しかなかった。学部生に対する教育は講座とほぼ一致する20程度の研究室(教室)が分担して行い、学部生が特定の研究室に所属するという形をとらなかった。その代わりに、研究室では助手や副手が他学部に比べ多く在籍し、彼らと教官によって研究室は構成されていた。

研究室の運営は、関東大震災以前までは、各研究室が全く独立に行っていた。したがって、図書室もまた各研究室が自分のものを持つことを原則としていた。当時は専任の図書室管理者を置かず、各研究室の助手などが、片手間に管理しており、図書室の規模がある程度以上に大きくなると、多くの図書室の運営は麻痺に近い状態に陥っていた。

もちろん、そうした状況に対応している研究室もあった。眼科学では、1922年に石原忍が主任となった際に、図書室や研究室が大いに改良された。図書室は、教授室の中に並べてあった図書を、別に部屋を設け、細かく分類し、閲覧席を設ける様になった。図書購入も積極的に行い、イタリア語やスペイン語の辞書まで購入していた<sup>33)</sup>。

こういった独立状態の転機になったのは関東大震災だった。震災からの再建の際に、従来分散していた各研究室の建物は、耐震耐火の少数の大型建物に部分的にまとめられた。図書室もまた部分的に統合の傾向をたどり、ある程度まとまった合同図書室ないし中心的図書室が作られはじめた。ただし、これは各研究室の自由意志で行われたため、研究室によって対応はまち

まちだった。旧来の通り極端に閉鎖的な図書室を持つ研究室もあった。前述の眼科もその一つである。

合同図書室の例として最も大きなものは、1938年に設立された医学部本館図書室であり、解剖学・病理学・法医学の3つの研究室の合同図書室であり、附属図書館の司書に図書整理を依頼し、専任の管理者を置き、基礎医学の中心的図書室としての役割を果たしていた。ただし、蔵書については自分の研究室におさめておきたがる研究室もあった。臨床医学も、内科図書室を中核としたかなり大きい病院図書室が、臨床医学の中央図書館の機能を実質果たしていた。だが、実際には図書はあちこちに散在しており、管理は各研究室にゆだねられていた。

以上の様に、ある程度の中心的図書室はでき、専門の管理者も置かれたが、図書そのものの実質的な管理はほんの部分的にとどまり、図書の所在・移動にともなう責任は、中央化されてはいなかった<sup>34)</sup>。

## 6 工学部

工学部は前述の様に工部大学校と東京帝国大学の前身であった東京大学の理学部が合併する形で1886年に東京帝国大学とともに成立した。前身の一つである工部大学校には、中央図書館といえる書房が一つ置かれ、専門の職員も配置されていた。だが、理学部と合併し、1886年に工学部となつてからは、職員も図書も附属図書館に移転し、中央図書館はなくなったと考えられる。

工学部の運営は、おおよそ11の学科が単位となっており、研究室も学科単位で設置された。そして、「教務室、図書室等の学科共通の要員は学科の規模が小さくてもある人数が必要でこのため研究室に配属できる人数が少なくなってしまう<sup>35)</sup>」という記述もあり、これは戦後に書かれたものではあるが、工学部では図書室は学科、研究室を構成する必要要素と見なされていることがわかる。助手は教官の補助や実験室のあらゆる実務を一手に引きうける役割を担っており<sup>36)</sup>、図書室を専属で管理する者が存在していたこと<sup>37)</sup>から、図書室専属の助手が管理を行っていたと考えられる。

各研究室は、工学部の本館に基本的に置かれていたが、徐々に各学科の人数が増えて来たため、いくつかの学科がその外に研究室を持つようになってきた。例えば、造船学科は、1903年に造兵学科と共有の建物に移った。各学科はそれぞれ独立に部屋を利用しており、図書室も学科で別に設けられていた<sup>38)</sup>。

研究室に置かれた図書室はどのようなものだったか

についてしてみると、例えば電気学科は、「図書室は書庫兼閲覧室、事務室等を兼ねた二室で計二十二坪位、学生は閲覧机の後ろにある書棚から自由に図書、雑誌を引出して、用が済んだら元へ戻しておくやり方であった。」<sup>39)</sup>とあり、開架式で学生も利用が可能だった。それぞれの図書室は、授業の参考書を閲覧する<sup>40)</sup>などで実際学生の利用があり、1943年の学生へのアンケートでは、学生向けの学部紹介パンフレットにおいて評価されている項目に、「図書室」や「図書閲覧」が入っている<sup>41)</sup>。

## 7 農学部

農学部は、1890年に東京帝国大学に合併され学部が設立されるが、その前身である東京農林学校のさらに前身である駒場農学校時代である1877年から1935年までの間キャンパスは、現在の教養学部がある駒場に置かれていた。その後、第一高等学校と敷地を交換して、本郷の弥生キャンパスに移転する。おおよそ講座単位で研究室が設けられていたが、いくつかの講座をまとめた学科に学生は属していたので、実際の運営単位はこの学科ではないかと考えられる。

本郷とは地理的に離れていたためか、図書館の運営も本郷からは独立した運営形態をとっていた。1908年には「東京大学一覽」においても、既に述べた様に附属図書館とは別に農学部で図書を保管することが明記されている。この記述がなされるようになったのは学部創設からずいぶん遅れているが、同年の一覽から他の学部所蔵図書についても「約六万冊八分チテ学内書教室研究室等二配置セリ」<sup>42)</sup>と言及がなされるようになったため、学部に置かれている図書がその学部に「配置」されていると規則においても明文化されていくまでの過程の一つとして、この記述の時期の遅れは捉えるべきだと考えられる。

運営は、学部設立前から学部事務が行い、主として学生を対象として、学生用図書や研究報告などの貸出と閲覧がサービスの中心であった。雑誌は学科、講座ごとに収集されていたが、総合目録の維持と管理は学部図書館が行っており、講座レベルでの運営は行なわず学部での集中制がとられていた<sup>43)</sup>。

だが、駒場から本郷へ移転したのは、戦争の影響で図書館は建設されず、図書は各学科、研究室に分散した。駒場から本郷への移転に対する当時の学生の回想では、研究室の移転で実験器具のみが登場するのに対し<sup>44)</sup>、別の学生の回想ではあるが、第二次大戦期の疎開では同じ移転でも図書と実験器具が述べられてい

る<sup>45)</sup>ことから研究室における図書の配架が増えたことがうかがえる。配架以外の運営がどのように変化したかは不明だが、雑誌だけでなく、図書に関しても学科、研究室単位の運営が中心になっていった。

## B 部局図書館運営の特徴

以上7学部の図書館運営について検討してきたが、学部図書館の特徴をまとめていくと、まずなによりもあげられるのが、図書館運営が多様な形で行われていたことである。学部ごとだけでなく、学部内でも、理学部、震災後の医学部のように研究室ごとに運営がなされている場合もある。また、時期によっても運営が変わる場合もある。ただし、ほとんどの学部図書館は学生に向けてサービスを行っていた。教官の許可が必要だった法学部や利用については不明の医学部をのぞいて、学生の利用が少なからず想定されており、農学部のように学生へのサービスが中心であり、当時附属図書館では認められていなかった貸出を許している図書館もあった。さらに、附属図書館には2,3回しか入らなかった、という工学部の学生の回想<sup>46)</sup>もあり、各学部、学科、研究室の学部図書館は、少なくともそこに所属する学生に対する図書館サービスには大きな役割を果たしていたのではないかと、考えられる。

学部の運営のあり方は多様ではあるが、分類すると大きく2つに分けられる。一つは、運営が集中している学部である。これは、経済学部と震災後の法学部、駒場時代の農学部、部分的ではあるが震災後の医学部がこれにあたる。もう一つは、運営が学科、研究室ごとに分散して行われている学部である。これは、理学部、工学部、文学部、そして震災前の法学部と医学部、本郷時代の農学部が当てはまる。図書室を運営する職員は、集中化している学部では、医学部は不明だが、学部の事務が、分散化している学部では、研究室の助手が行っている。また、研究室も集中化している学部と分散化している学部では異なっている。集中化している学部をしてみると、駒場時代の農学部は分散している学部と同様の運営だが、医学部では、学生は研究室に所属せず、教官のみが所属している。関東大震災後の法学部、経済学部では、学部全体で一つの研究室を運営する形をとっており、学科や講座単位での研究室は存在していない。以上の様に研究室が多様である集中化している学部に対し、分散化している学部での研究室は全て、教官に加え学生も所属する場であり、学科または講座単位で研究室が存在している。

また、運営の変化が最も起きているのは、関東大震

災の時期である。法学部、経済学部、医学部がこれにあたるが、農学部の移転も、実際の移転は10年ほど先になるが、1924年には決定している。そしてこの時期の運営の変化は、戦争の影響で図書館建設ができなかった農学部以外、集中化が進む方向で行われている。

#### 4 おわりに

本稿では、東京帝国大学の学部図書館の管理運営がどのように行われていたかを検討した。その結果、東京帝国大学はその成立、制度上において、各学部、講座独自の運営が容認される状態であり、学部図書館運営も学部、講座ごとに多様であった。ただし、学生に対するサービスは多くの学部図書館で行われていた。図書館運営のあり方を大きく分けると、学部内で集中的な運営をしているものと、学科や研究室ごとに分散的な運営をしているものに分けられ、集中的な運営をしている学部は、関東大震災を機に運営の集中化が行われることが多かった。

学部に関する一次史料は、「東京大学百年史」などに使用されたものも含め、現在は利用できないものが多く、本稿では必ずしも十分な検討ができたとはいえないが、この結果を受けて今後の検討すべき課題は、なぜこのような多様性や変化が生じたのか、ということになる。まずもっとも大きいと考えられるのが、場所という要素だ。駒場時代の農学部は、本郷とは離れた場所にあったことで、はやくから図書も別の運営がなされる事が認められたと考えられ、また法学部、医学部、経済学部は、震災により建物が新築され、集中化した図書館、図書室の設置が可能となったことが運営の集中化の大きな原因と考えられる。ただし、分散的な運営を行っていた文学部なども震災によって建物を新築したにもかかわらず、図書館の集中化がなされなかったことを考えるとこれだけが理由とは言えない。大学令の制定に代表される当時の大学をめぐる状況の変化や、さらには各学部の学問や学部教育の特性について、今後より検討を進める必要がある。

(指導教官 根本彰教授)

#### 注及び引用文献

- 1) 主要なものとして、以下の文献があげられる。東京大学百年史編集委員会 編 1987a『東京大学百年史 部局史四』東京大学、薄 久代 1987『色のない地球儀』同時代社、阪田 蓉子 1991『明治期の高等教育政策と東京帝国大学附属図書館』『梅花女子大学文学部紀要 人文・社会・自然科学』第26巻, pp. 47-74、阪田 蓉子 1993『大正期の高等教育政策と東京帝国大学附属図書館』『梅花女子大学文学部紀要 人文・社会・自然科学』第28巻, pp. 101-122、高野 彰 2004『明治初期東京大学法文学部図書館史』ゆまに書房
- 2) 正確にはこの時点での名称は帝国大学であり、1897年から東京帝国大学と改称されるが、以降混乱を避けるため本研究では帝国大学時代も東京帝国大学と統一して呼称する。
- 3) 東京大学百年史編集委員会 編 1984『東京大学百年史 通史一』東京大学, pp. 917-948
- 4) 同上, pp. 796-801
- 5) 寺崎 昌男 1979『日本における大学自治制度の成立』評論社, pp. 257-260
- 6) 東京大学百年史編集委員会 編 1986『東京大学百年史 部局史一』東京大学, p. 843
- 7) 東京大学百年史編集委員会 編 1985『東京大学百年史 通史二』東京大学, pp. 292-297
- 8) 大学問題検討委員会 1972『大学の未来像について(答申)』京都大学, pp. 56-63
- 9) 東京大学百年史編集委員会 編、前掲書(1987a), pp. 854
- 10) 竹林 熊彦 1942『田中稲城著作集(二)』『図書館雑誌』第36巻 第7号, p. 391
- 11) 波多野 賢一 1942『和田万吉先生伝—協会創立前後並びに大学図書館奉職当時の一(一)』『図書館雑誌』第36巻 第3号, pp. 191-192
- 12) 東京帝国大学 1908『東京帝国大学一覧 従明治四十一年至明治四十二年』, p. 422
- 13) 東京帝国大学 1926『東京帝国大学一覧 従大正十五年至昭和二年』, p. 330
- 14) 東京帝国大学 1936『東京帝国大学一覧 昭和十一年』, p. 290
- 15) 東京大学百年史編集委員会 編、前掲書(1986), pp. 98-102
- 16) 東京帝国大学 編 1942a『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』東京帝国大学, p. 10
- 17) 東京帝国大学 編、前掲書(1942a), p. 10
- 18) 東京大学百年史編集委員会 編、前掲書(1986), p. 202
- 19) 東京大学経済学部 編 1976『東京大学経済学部五十年史』東京大学出版会, p. 767
- 20) 同上, p. 617-620
- 21) もう一つの前身として、保険研究室がある。こちらは、保険業界の援助を受け、保険の学理・実務の講習を行っていた。
- 22) 東京大学百年史編集委員会 編、前掲書(1986), p. 917
- 23) 同上, p. 934
- 24) 東京大学経済学部 編、前掲書(1976), p. 641
- 25) 同上, pp. 764-767
- 26) 東京大学百年史編集委員会 編 1987b『東京大学百年史 部局史二』東京大学
- 27) 東京帝国大学理学会部 1933『理学会誌』第12巻, p. 92
- 28) 東京帝国大学理学会部 1938『理学会誌』第16巻, p. 82
- 29) 東京帝国大学理学会部 1932『理学会誌』第11巻, p. 151
- 30) 東京帝国大学 編 1942b『東京帝国大学学術大観 総説 文学部』, p. 196
- 31) 東京大学百年史編集委員会 編、前掲書(1986), p. 465

1) 主要なものとして、以下の文献があげられる。東京大学百年史編集委員会 編 1987a『東京大学百年史 部局史四』東京大学、薄 久代 1987『色のない地球儀』同時代社、阪田 蓉子 1991『明治期の高等教育政策と東京帝国大学附属図書館』『梅

- 32) 深川 恒喜 1980「研究室時代の思い出」『時と人と学と：東京大学宗教学研究部の七十五年』東京大学文学部宗教学研究部, p. 46
- 33) 東京大学医学部眼科学教室創立百周年記念事業準備委員会 編 1989『東京大学医学部眼科学教室百年史』, pp. 89-90
- 34) 東京大学医学部百年史編集委員会 編 1967『東京大学医学部百年史』東京大学出版会, pp. 743-744
- 35) 東京大学百年史編集委員会 編 1987c『東京大学百年史部局史三』東京大学, p. 241
- 36) 同上, pp. 27-28
- 37) 梅村先生を囲んで40年を出版する会 編 1979『梅村先生を囲んで40年』東京大学工学部建築学科, p. 62
- 38) 三好 晋六郎 1903「我大学に於ける造船学」『造船協会会報』第2号, pp. 88-92
- 39) 瀬藤 象二 1969「大正初期の教官室, 図書室, 実験室」『東大電気工学科の生い立ち』東京大学電気工学科同窓会, p. 104
- 40) 星合 正治 1979「あの頃の教授室」『瀬藤象二先生の業績と追憶』瀬藤象二先生追憶記念出版会, p. 147
- 41) 岩崎 敏夫 1943「工学部学生意向統計について」『第一工学部会報』第30号, pp. 114-117
- 42) 東京帝国大学, 前掲書(1908), p. 421
- 43) 東京大学百年史編集委員会 編, 前掲書(1987b), pp. 1017-1018
- 44) 渡辺 弘毅 1960「駒場から本郷へ」『東京大学農学部水産学科の五十年』東京大学農学部水産学科創立五十周年記念会, pp. 193-195
- 45) 水江 一弘 「アプレー号」同上, pp. 222-223
- 46) 下村 尚信 1983「学生時代の思い出」『東大電気工学科のあゆみ』東京大学電気・電気工学科同窓会, p. 82